

# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第127号

イザヤ 65:1

平成18年4月28日

~~~~~  
 イエスはもう一度たとえを持って彼らに話された。『天の御国は、王子のために結婚の披露宴を設けた王にたとえることができます。王は、招待しておいたお客を呼びに、しもべたちを遣わしたが、彼らは来たがらなかった。それで、もう一度、次のように言いつけて、別のしもべたちを遣わした。『お客に招いておいた人たちにこう言いなさい。「さあ、食事の用意ができました。雄牛も太った家畜もほふって、何もかも整いました。どうぞ宴会にお出かけください。」』ところが、彼らは気にもかけず、ある者は畑に、別の者は商売に出て行き、そのほかの者たちは、王のしもべたちをつかまえて恥をかかせ、そして殺してしまった。王は怒って、兵隊を出して、その人殺しどもを滅ぼし、彼らの町を焼き払った。そのとき、王はしもべたちに言った。『宴会の用意はできているが、招待しておいた人たちは、それにふさわしくなかった。だから、大通りに行って、出会った者をみな宴会に招きなさい。』それで、しもべたちは、通りに出て行って、良い人でも悪い人でも出会った者をみな集めたので、宴会場は客でいっぱいになった。ところで、王が客を見ようとしては行って来ると、そこに婚礼の礼服を着ていない者がひとりいた。そこで、王は言った。『あなたは、どうして礼服を着ないで、ここには行って来たのですか。』しかし、彼は黙っていた。そこで、王はしもべたちに、『あれの手足を縛って、外の暗やみに放り出せ。そこで泣いて歯ざしりするのだ。』』と言った。招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。 マタイ22：1-14。

三月号で取り上げた《二人の息子のたとえ》は、だれが先に神の国に入っているかに焦点を合わせた教えで、イエスは、聞いていた祭司長や長老たち、ユダヤ人宗教家には意外な結末で締めくくられたものでした。イエスの教えは、伝統、人間の教え、言い伝えに従って独善的な宗教行為は人一倍熱心に行っていたが、肝心の父なる神の御旨を實踐していなかった彼ら宗教家たちではなく、救いから除外されていると彼らが信じ、非難していた取税人や遊女たち<sup>つみびと</sup>が、悔い改めてキリストの福音を受け入れることによって先に神の国に入っているというものでした。「天におられるわたしの父のみこころを行なう者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。」(マタイ12：50)とイエスが神の家族に受け入れられる者の尺度を神の御旨の實踐に置かれたように、神が恵みによって提供して下さった救いを信仰で受け入れた者が、自発的に父なる神の愛に応え、御旨を行なっていくことが期待されたのでした。神の期待を裏切った者は、役に立たぬしもべとして「外の暗やみに」追い出され、「そこで泣いて歯ざしりする」という結末が前回取り上げたもう一つの《タラントのたとえ》の教えでした。聖書解釈上、追い出されたり、締め出された者が泣いて歯ざしりする「外の暗やみ」が何を意味するのかで見解が分かれています。最初のたとえの中でイエスが語られた「取税人や遊女たちのほうが、あなたがたより先に神の国にはいるのです」の意味、「招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです」の意味も定かになっていないようです。これらを考察するため、今回はまず、関連した他のたとえを取り上げます。

冒頭に引用した《王子の結婚の披露宴のたとえ》は、神の招きを拒んだ者の上には神の裁きが下り、招きに答えた者には、神の祝福が与えられるという神の国の原則に沿って、受難週に宮の中で語られたものです。ルカの福音書にも状況設定がよく似た《大宴会のたとえ》が記されていますが、語られた場所、時期、たとえの焦点が異なっていることから、明らかに全く別のたとえとみなすことができます。今回取り上げたたとえは、王子の結婚式ですから、花婿、花嫁に焦点を当てた新約時代が背景で、父なる神を夫、選民イスラエルを妻、すなわち、夫婦として描いている旧約時代に、神のしもべとして献身した旧約の預言者は、このたとえに登場する「しもべ」には含めなくてもよいようです。したがって、このたとえの時の設定はキリストの時代から、弟子、使徒、キリストの証し人たちの宣教の時代、すなわち異邦人(教会)の時代に及び、その間の歴史に言及する預言的たとえです。

神はしもべを送って御子の結婚の披露宴に人々を招待します。御子の結婚の披露宴に象徴されているのは、神の国の福音です。人々は神の国の福音を受け入れるよう招かれたのでした。最初に送られたしもべたちは、バプテスマのヨハネと十二弟子です。「花婿の友人」としての役割を果たすべくユダヤの結婚式の風習に従って、すでに前もって招待されていた客、すなわち、契約の民ユダヤ人に遣わされたものでしたが、彼らは行きたくないの理由にもならない口実を設けて招きを拒みます。まさに、「この方はご自分の国に来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった」とヨハネが語ったように、ユダヤ人のメシヤ、イエス・キリストは、ご自分の同胞であるユダヤ人によって拒絶されたのでした。そこで神は再び、『使徒の働き』に宣教の様子が記されているように、使徒たちに加えて、他の多くのしもべたちを遣わされます。しかし、ユダヤ人たちは招きを軽んじたり、神よりも自分のことを優先にし、この世の物、この世の仕事に熱中してやはり招きに応じませんでした。招きを拒んだだけでなく、神から遣わされたしもべたち、

すなわち、キリストの証し人<sup>あか</sup>たちを迫害、殺してしまいます。第一、第二の招待に象徴される『バプテスマのヨハネ、イエス、弟子、使徒、証し人たちの福音宣教』が、暴力行使で拒絶され続けたとき、神の怒りがついに国家としてのイスラエルの上に下ったのでした。西暦七十年、ローマの軍隊によって神殿もろともエルサレムは焼失、崩壊したのです。神の名によって建てられ、神の御臨在の場であるエルサレム神殿が、破壊されることはない<sup>と高をくくっていたユダヤ人宗教家たちは、偽りの安心感から都エルサレムに籠城していたのですが、都もろとも反逆のイスラエルは滅びたのです。それはまさにイエスが預言されたとおりでした。「あなたがたの家は荒れ果てたまま残される。」</sup>「やがておまえの敵が、．．． 壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、．．． おまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日がやってくる．．． 神の訪れの時を知らなかったからだ。」

それ以降、ユダヤ人たちは全地に散らされ、イエスの預言「人々は剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。」（下線付加）の状態、すなわち、引き続き裁きの中に今日に至るまで置かれているのです。信仰と聖霊に満ちたキリストの証し人ステパノは大祭司の前で、弁明したとき、「かたくなで、心と耳とに割礼を受けていない人たち。あなたがたは、先祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっているのです。あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者がだれかあったのでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを前もって宣べた人たちを殺したが、今はあなたがたが、この正しい方を裏切る者、殺す者となりました」（使徒の働き7、下線付加）と、福音に応じなかったユダヤ人指導者、大衆に訴えました。モーセの掟は殺人にもうっかりと意図的の二通りの定義があり、「あやまって人を殺した者」には「のがれの町」が用意されているが、意図的、憎しみによる「殺人者」には、血で贖う死刑以外ないと定めています。このことを考慮すると、ステパノは後者の意味で、「殺す者」としてユダヤ人たちを訴え、自ら石打ちにあって犠牲の死を遂げたのでした。彼の殉教死も西暦七十年に下った神の裁きもまさにイエスがたとえに託された預言の成就だったのでした。

その後、神は今度は、「招待しておいた人たちはそれにふさわしくなかった」ので、招待しておいたお客ではなく、「大通り」に行き、出会った者をみな宴会に招きなさい」と、三度目の招きをされます。このことは、福音が異邦人の国々に伝えられ始めたという史実を反映しています。「大通り」に象徴されているのは、より速く、より効率よく軍隊を送るため帝国中に道路網を張り巡らしたローマ帝国です。『使徒の働き』の前半には、ペテロがユダヤ人からサマリヤ人へと伝道したこと、後半には、パウロがアンテオケからローマへと異邦人伝道に励んだことが記されていますが、このようにして、ユダヤ人から始まった福音は異邦人に広く伝えられていったのでした。

さて、大伝道によって多くの人々が招き入れられ、宴会場はいっぱいになります。マタイ13章のたとえに集約して語られているように、この世の神の国（キリストの初臨によって信じる者たちの間に革命的にもたらされたが、まだすべての人の目に明らかな形では実現していない神の国）には、善悪、麦と毒麦、忠実と不忠実が共存しています。エジプトから解放されて荒野に連れ出された神の選びの民イスラエルが、善なる純潔民族ではなく、善悪さまざま外国人も多く入り混じった群れで、四十年の放浪生活の後約束のカナンの地に入るとき、入る者が選別されなければならなかったように、また、ユダの民の残りの者がバビロンから七十年ぶりにエルサレムやユダヤに戻されたとき、異教的な習慣から民を聖めるため、モーセの掟では認められていなかった混血の者たちが取り分けられたように、善悪が共存している現存の神の国も、キリストの再臨のときには善悪二者がはっきり分かたれることになるのです。その選別の基準はたとえば、王から与えられた「婚礼の礼服」です。王から『どうして礼服を着ないで宴会に来たのか』と問われた者が返答できなかったということは、イスラエルの結婚の披露宴がどのように催されたかの文化的、民族的背景が分かったと理解の助けになります。創世記や列王記にも記されていますが、中東の王たちの習慣に、勢力にふさわしい贈り物を客に配るというのがあり、「晴れ着」を与えるのもその一つでした。客たちは贈られた高価な晴れ着を早速着て宴会に出席するのが主催者に繁栄と栄光を帰し、宴会に一層華やかさを添えることになったのでした。そうすることは客の謝意の表明であり、主催者も当然それを期待したのです。言うまでもなく、もし贈られた晴れ着に不服があり、他人のと比べて不満に思い、着ていかなかったとしたら、贈り主を侮辱する行為とみなされたのです。明らかなように、たとえで婚礼の礼服を着ていなかった者は、与えられた礼服を意図的に着なかったのであり、王が期待することが何であるかを知っていながら、自分自身の選別を優先したということなのです。「婚礼の礼服」に象徴されているのは、神が御子キリストを通して私たち罪人に贈り物としてくださった信仰義認による「救いの衣」です。神に問われ、自責の念にかられ、押し黙ってしまった人、言い換えれば、神の義ではなく、自分の義、努力に頼ったこの人の状態をパウロは次のように語っています。「律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われている。．．． それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。」（下線付加）。パウロは、ユダヤ人同胞が「神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったから」御子を通して救われるという神の招きを拒み、したがって神もイスラエルを拒み、救いが異邦人に及んだのであると語りましたが、神の招きに答え、キリストを受け入れた者たち、すなわち、教会の中にも、神の信仰義認による一方的な救いを信頼せず、まだ独善的な衣をまとっている者、すなわち、自らの義、わざ、努力に頼っている者がいることをこのたとえは警告しているのです。この人は、手足を縛られ、外の暗闇に放り出され、泣いて歯ざしりすることになります。キリストの福音は受け入れたものの、キリストとの正しい関係、親密な絆が築き上げられていなかったために、神が分からず、信頼できず、結局はキリストによる救いにすべてを委ねることができず、神の国から締め出されたのでした。